

29 加門桂太郎の京都府醫学校での解剖学講義録について

島田 和幸¹⁾, 内藤美智子²⁾

¹⁾ 鹿児島大学名誉教授/東京医科大学, ²⁾ 日本大学医学部

加門桂太郎は明治24年(1891)より明治33年(1900)まで京都府醫学校に在職し、その間に、解剖学、局所解剖学及び組織学の講義を担当した。

今回紹介する当時の学生による講義録は、解剖学(系統解剖学)に関しては三冊、局所解剖学に関しては一冊の計四冊である。

各冊の講義録の紹介

①『解剖学一篇(骨学, 靭帯学, 筋学)』について

記述内容は骨学, 靭帯学, 筋学の順に記載されている。序論, 骨学総論に始まり, 骨学各論へと進んでいく。各論としては脊柱骨, 肋骨, 胸骨, 舌骨, 頭蓋骨, 上肢骨, 手の骨, 下肢骨, 下脚骨, 足の骨について各骨に関する詳細な説明や解剖図も記載されている。まず靭帯学は, 靭帯学概論, 関節体幹の靭帯(頭部も含む), 上肢靭帯, 下肢靭帯について記述されている。筋学については概説, それから各論に入っている。各論は体幹の諸筋, 頭筋(表情筋, 下顎骨の筋, 舌骨の筋), 頸筋, 胸筋, 腹壁の諸筋, 上肢の諸筋, 手筋, 下肢の諸筋, 足部の諸筋の詳細な説明が記述され, 最後は各部位の筋に関してのまとめと記述者による解剖図が多数画かれている。

②『解剖学二篇(内臓学, 血管学)』について

内臓学に関しては大きく二型に分類されている。I型は腸系統で(1)消化器と(2)呼吸器, II型は泌尿器生殖器系統で(3)泌尿器と, (4)生殖器について記述されている。血管学に関しては, 始めは心臓の概念と心臓の各部位の構造が, そして血管系統は始めに動脈系として肺循環と全身循環が述べられ, 次に各論に入っている。各論は上行大動脈の枝, 大動脈の枝が述べられ, 次に外頸動脈, 内頸動脈, 鎖骨下動脈, 上腕動脈, 腋窩動脈, 前腕動脈, 下行大動脈, 下腿, 足の動脈について述べられ, 静脈系としては肺静脈, 心臓の静脈, 上行大静脈, 脳静脈, 顔面部静脈, 奇静脈及び半奇静脈, 下大静脈, 門静脈, 総腸骨静脈が述べられ, 最後は胎児の血液循環が説明されている。終わりはリンパ系で, リンパ管, リンパ濾胞とリンパ腺, 脾臓, リンパ管系の経過として頸リンパ幹, 鎖骨下リンパ幹, 右気管縦隔リンパ幹, 腰リンパ幹などについての説明がされている。

③『解剖学三篇(五管器, 神経系統)』について

五管器(感覚器系)とは触官器としての外皮の構造, 毛髪, 爪, 外皮の腺, 次に嗅器, 味器(舌), 視器(目), 聴器(耳)の説明がされ, 神経系統は, 始めに末梢部の神経, 脳神経系について詳細に記述されている。その次は脊髄神経, 頸椎神経, 脊椎神経, 腰椎神経, 仙骨神経叢, 陰部神経叢, 交感神経系統など末梢神経系について記述されている。

④『局所解剖学』について

局所解剖学の概説に始まり, 上肢, 次に下肢と後臀部, 前臀部, 股, 大腿部, 膝部, 膝窩部, 下腿部, 足の部について記述されており, 最後は頭部, 顔面部, 口部, 舌に関する局所についての記述がなされている。

八木(2014)は, 京都府立医科大学図書館に現存する講義録の大半は明治30年の物で, 古くても明治20年, 次に27年の物と報告している。

今回報告する解剖学講義録は, 明治25年から26年と記載されていることから, 欠落している時期の講義録と考えられる。また加門による局所解剖学に関する講義録の報告はこれまでのところ報告はない。従って, 今回の報告は加門が明治期にどのような解剖学講義を行っていたかについて解剖学教育史の観点からも興味ある問題と考える。